

工手学校

旧幕臣たちの技術者教育

茅原 健 著

著者は、工学院大学の運営に関わった後、私学教育研究所の研究員、事務局長、理事等を歴任。本書のほか、『新しい教育環境と学校施設』などの著書がある。

「工手学校」とは、明治20年、専門の技術者を補助する工手（技師と職工の中間の技術者）養成のために設立された学校で、工学院大学の前身をさすが、後に早稲田工手学校などが設立されている。

副題が示すとおり、工手学校の設立にあたっては、旧幕臣たちの「近代の夜明けは“技術者教育”で」という強い思いがあった。

本書は、単なる“工学院大学の学校史”としてよりは、むしろ近代史という視点で読み応えのある本であると言える。

第1章では、いわゆる明治維新「負け組」の榎本武陽、大鳥圭介、渋沢栄一など旧幕臣たちが中心となって、「技術教育立国」のスタートとなる“沼津兵学校”（明治元年、後の陸軍兵学校）の創設から話は進められる。

教官や学生に、後に私学教育に関わった人たちが多くことは興味深いところである。

「商」の重要性から設立された、商法講習所（現一橋大、明治8年）や、新時代の女子教育を目指して創立された明治女学校（明治18年）などにも旧幕臣が関与している。

著者はこれを「旧幕臣たちの教育ネットワーク」と名付けている。

明治10年代、日本は近代国家の確立期を迎えようとしており、欧米と肩を並べるには、「工業立国」「殖産興業」が必須の国策であると考え、そのために、多くのお雇い外国人が来日することとなる。お雇い外国人主導の施策は相当の実績を上げたが、そのなかで、西欧一辺倒、

お雇い外国人依存にならないようにという考えが芽生えてくることとなる。

当時の工業技術教育の中心は、明治6年創立の工学寮（後に工部大学校と改称、現東京大学工学部）であった。工学寮の教育目的は工業技術官僚の養成であり、別に、中堅の工業技術者育成のための「製作学教場」（明治7年）が設立されたが、エリート養成の性格が強まったことや財政上の問題などから廃校となるが、明治15年、当初の理念を受け継いだ「東京職工学校（現東京工業大学）」が創立された。

第2章では、このような流れのなか、工業技術者養成、とりわけ中堅の技術者養成のための学校が全くないことを憂いていた帝国大学総長の渡邊洪基は、教授の辰野金吾とともに「工手学校」の設立を関係方面に働きかけ、創立に至るまでの経緯について述べている。

設立にあたっては、旧幕臣でありながら明治政府の要職と務めた田口卯吉（大蔵省）や大鳥圭介（工部大学学校長）のほか、旧幕臣の系列に繋がる人物の尽力があった。いわゆる「旧幕臣たちの教育ネットワーク」が機能した結果であったと言える。

第3、4章においては、「渡邊洪基と14人のサムライ」「大鳥圭介の技術立国」と題して、創立に関わった人たちの、その「人となりについて」の紹介である。

第5、6章においては、財政的支援を惜しまなかった渋沢栄一や岩崎弥之助、榎本武陽らの工業教育に対する想いが紹介され、第8章においては、東京工科学校（現日本工業大学）や電機学校（現東京電機大学）が創立された明治40年代を概観し、第9章以降においても、工業倫理の視点や「工業教育かくあるべし」という想いが述べられているなど、工業人にとって興味ある内容となっている。

（中央公論新社、345頁、924円）（梅田 政勝）